詞牌略解

特35
794

東京帝國大學圖書之印

祝詞式解三之卷

久保季茲　謹編

（刪補）

○月次十二月准之。

○今按ずるに此下に考に祭字を補はれたりまことにあるべき理なり○考云四時祭式に月次祭六月十二月十一日と見えたり神祇令月次祭義解に於神祇官祭與祈年祭同如庶人宅神祭也とありこは祈年と均しく京畿諸國を合て三千百三十二座の神たちへ月毎ゑ奉り玉ふ幣と六月と十二月の十一日に諸國の神主祝部を神祇官へ集へて頒ちたまふありこの正月より六月までの幣は十二月ゑ頒ち七月より十二月までの幣は六月に

頒ち賜はせる也○後釋云此祭に預り給ふ神は諸國合せて三百四座にして皆大社なれて案上乃官幣に預りあまふなを神名帳にも此祭に預り玉ふ神社には各々月次と記されたり其外は預り玉ふことと無し然ると考に此は祈年と均しく京畿諸國を併せて三千百三十二座の神たちへ云々と云れたるは四時祭式の此祭の條に右所レ祭神並同二祈年一とあるをふと思ひ誤られたるなり同二祈年一とは此祭に預りあまふ神たちも祈年祭に幣を案上に奠(オク)三百四座乃神と同じ神等也といふこと也○講義云この詞を見るに全く祈年祭詞と同文なる事人の能知る所なるが其中に御年神の詞一つ省かりたるのみにてすべては同じ(御年神の詞の省かりたるが)は祈年は稲穀の御祈を主と爲せたまふか爲なるを此は唯大御世の事の御祈を以主と一て祀らせ玉ふか故あり心を付へしかくて月次れ御政畢る其夜に入て神今食(ヲシ)御祭ありて六月十二月共に行はるゝ事かるが世人おを別なる神事の如く思ふめれど然にあらぜ諸社の新嘗の幣帛を行はれて其夜天皇乃新嘗を供らせ給ふゞ如く神今食は月次祭の最重きものなり公事根源抄に神今食の義は年二度也伊勢天照大神を勸請申されて天子御自身神饌と供せさせ玉ふよやとあるに心引れて考るに伊勢大神宮の六月十二月々次祭は九月神嘗祭と此三ッとも て年中三節祭と云て無上甚し(御祭なるが爲に勅使發遣の日を以天皇御自身神饌を供らせ玉ひて御神事と行ハせ玉ふものあり云々

集侍神主祝部等。諸聞食登宣。
高天原爾神留坐。皇睦神漏伎命。神漏彌命以。天社國社登稱辭竟奉。皇神等前爾白久。今年乃六月月次幣帛。十二月者。云今年十二月月次幣帛明妙照妙和妙荒妙備奉氐。朝日乃豐榮登爾。皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣。

○月次幣帛　今按ふ考ふ比下ふ波字あれど諸本無し講義ふ考ふ私に加られしものとし倭國六御縣山口神詞ふよりて乎を訓そへたり此はさる事也○明妙照妙云々講義云との明妙云々のことと祈年祭詞ふは見えず此に申さしめたまふは月次祭は月次の幣帛を進らるゝが主なる故也詞ふ月次幣帛と表しあるまへるを思ふへし　されば各詞に其御祈の言あるも月次幣帛を進らるゝふ付て祈申させ玉ふなり此祈年の趣意とは異なる所なり云々

○今按に荒妙の下に講義にハ本朝月令ふ從ひて爾字と補へりとは誠に然る事也○考云祈年ふハ右の次に御年皇神云々の文あれどそれは爰ふは無て其次の座摩能御巫よりして御門生島伊勢御縣山口水分辭分忌部云々捧持奉登宣と云までは皆祈年と全く同文也云々○今按ふ此文ども何れも第一卷に注せると見て知べし

大御巫能辭竟奉。皇神等能前爾白久。神魂。高御魂。生魂。足魂。玉留魂。大宮賣。御膳都神。辭代主登。御名者白豆辭竟奉者。皇御孫命乃御世乎。手長御世登。堅磐爾常磐爾齋比奉。茂御世爾幸閉奉故。皇吾睦神漏伎命神漏彌命登。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣。

座摩乃御巫辭竟奉。皇神等乃前爾白久。生井。榮井。津長井。阿須

波。婆比伎登。御名者白豆辭竟奉者。皇神能敷坐。下都磐根爾宮柱太知立。高天原爾千木高知豆。皇御孫命瑞乃御舍仕奉豆。天御蔭日御蔭登隱坐。四方國登。安國登平久知食須故。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久宣。

御門能御巫能辭竟奉。皇神等能前爾白久。櫛磐間門命。豐磐間門命登御名者白豆辭竟奉者。四方能御門爾。湯都磐村能如久。塞坐豆。朝者御門開奉。夕者御門閉奉豆。疎布留物乃。自下往者下乎守。自上往者上乎守。夜乃守日乃守爾守奉故。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久宣。

生島乃御巫能辭竟奉。皇神等乃前爾白久。生國足國登。御名者白豆辭竟奉者。皇神乃敷坐。島乃八十島者。谷蟆能狹度極。鹽沫乃留限利。狹國者廣久。嶮國者平久。島乃八十島墮事無久。皇神等寄志奉故。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久宣。

辭別。伊勢爾坐。天照大御神乃大前爾白久。皇神乃兒霧志坐。四方國者。天乃壁立極。國乃退立限。青雲能靄極。白雲乃向伏限。青海原者棹柁不干。舟艫乃至留極。大海原爾舟滿都都氣氏。自陸往道者荷緒結堅氏。磐根木根履佐久彌氏。馬爪至留限。長道無間久。立都都氣氏。狹國者廣久。峻國者平久。遠國者。八十綱打挂氏。引寄如事。皇大御神寄志奉波。荷前者。皇大御神乃前爾。如橫山打積置豆。殘乎平聞看。又皇御孫命御世乎。手長御世登。堅磐爾常磐爾齋奉。茂御世爾幸閉奉故。皇吾睦神漏伎命神漏彌命登。鵜自物頸根衝拔豆。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久登宣。

御縣爾坐皇神等乃前爾白久。高市。葛木。十市。志貴。山邊。曾布登。

御名者白氏。此六御縣爾生出。甘菜辛菜乎持參來氏。皇御孫命乃長御膳乃遠御膳登聞食故。皇御孫命能宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久宣

山能口坐。皇神等乃前爾白久。飛鳥。石村。忍坂。長谷。畝火。耳無。登御名者白氏。遠山近山爾生立流。大木小木乎。本末打切氏持參來豆。皇御孫命乃瑞乃御舍仕奉氏。天御蔭日御蔭登隱坐豆。四方國乎。安國登平久知食須我故。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久宣。

水分坐。皇神等乃前爾白久。吉野。宇陀。都祁。葛木登。御名者白豆。辭竟奉者。皇神等依志奉牟。奥都御年乎。八束穂乃伊加志穂爾。依志奉者。皇神等爾。初穂者頴毋爾汁毋。瓰閉高知。瓰腹滿雙氏。稱辭竟奉氏。遺乎波皇御孫命乃。朝御食夕御食乃加牟加比爾。長御食乃遠御食登。赤丹穂爾聞食故。皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎。稱辭竟奉久乎。諸聞食止宣。

辭別。忌部乃弱肩爾。太襁取挂氏。持由麻波利仕奉。總留幣帛乎。神主祝部等受賜氏。事不過捧持奉登宣。

○大殿祭

○考云宮內省式に神今食新嘗二祭明日平旦大殿祭云々○四時祭式に神今食明日平旦云々（三代實錄より一諸書神今食は月次祭と同しく六月十二月の十一日のタより曉まてあり然るに大殿祭は其十二日の平旦也）○古語拾遺に條武天富命率諸齋部捧持天璽鏡劔奉正殿幷懸瓊玉陳幣物殿祭祝詞（其祝詞亦在別卷）次祭宮門（其祝詞亦在別卷）と云り忌部乃大殿祭に預る事は神武天皇の御時も神代のまゝ傳へて然あるべき事也云々○今按に宮內式大殿

祭とある下に此云於保登能保加比と注せり保加比は保岐を延たる言也さて祝詞式の首に凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞とあり

高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐皇御孫乃命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃鏡劔乎捧持賜天言壽古語云許止保企言壽詞如ノリトヒ志宣久皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座今壽詞之詞宣久爾坐氐天津日嗣乎万千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止古語云志女須言寄奉賜氐以天津御量旦事問之磐根木根立草能可岐葉毛言止氐天降利賜志食國天下登天津日嗣所知食須皇御孫之命乃御殿乎今奥山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採旦本末乎山神爾祭旦中間乎待出來旦齋鉏乎以旦齋柱立旦皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉但禮流瑞之御殿古語阿良可天津奇護言乎古語伊波比許登以氐言壽鎮白久此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根古語番繩之類謂之綱根波府虫能禍無久高天原波宵雲乃靄久極美天乃血垂飛烏乃禍無久掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯比古伎加比動鳴事無久引結幣葛目能緩比取曹計草乃喙岐蘇蘇岐古語云無久御床都比能佐夜伎夜女能伊須須伎伊豆都志伎事無久平氣久安奉護留神御名乎白久屋船久久遲命是水屋船豐宇氣姫命登是稻靈也俗謂宇賀能美多麻今世產靈之類也屋船命爾天津奇護言乎伊波比許登以氐言壽鎮白久此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美下津綱根波府虫能禍無久高天原波宵雲乃靄久極美天乃血垂飛烏乃禍無久掘堅多留柱桁梁戸牖乃錯比古伎加比動鳴事無久引結幣葛目能緩比取曹計草乃喙岐蘇蘇岐古語云無久御床都比能佐夜伎夜女能伊須須伎伊豆都志伎事無久平氣久安奉護留神御名乎白久屋船久久遲命是水屋船豐宇氣姫命登是稻靈也俗謂宇賀能美多麻今世產靈之類也屋船命爾於戸邊乃以米散屋中御名乎奉御孫命乃御世乎堅磐常磐爾奉護利五百枝御世乃足志良御世爾田永能御世止奉福爾依氐齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕留瑞八尺瓊能御吹伎乃五百都御統乃王爾明和幣爾古語云曜和幣乎附氣齋部宿禰某我弱肩爾太襁

取懸氏。言壽伎鎮奉事乃。漏落武事乎波。神直日命。大直日命。聞直志見直氏平尼氣安眞氣久所知食登白。

○神魯企神魯美　史徵云此なる神魯企神魯美は天照大御神と高皇產靈神とを申せり然して天津璽乃鎮劔乎捧持云々は天照大御神へ係れり○皇御孫之命　考云天孫彥火邇々伎命を申せり○今按ふ此御稱の解は祈年祭詞ふ出せり○天津高御坐　講義云こゝ天照大御神の天津朝廷の大御座所と申せり葦原中國を統御せ爲に天降奉り玉ふ故に其御座上ふ坐奉らせ玉ひて天皇の御位に即け奉り玉へるなり云々直靈に高御座と申すは唯に高き由のミにあらず日神の御座なるゝ故也日には高照と も高日とも日高とも古語のあるを思へ偖日神の御座を

次々ふ受傳へまして其御座に大座坐す天皇に坐せば日神に均しく坐せ事決し云々○坐氐　講義云麻世氐と訓べし令坐豆の義なり神魯岐神魯美命は皇孫命を天津高御座に令坐奉り玉ふ事なるか故なり下なるゝ天津高御座を皇孫命の葦原中國に持降り御坐て云々乃事を物し玉へと仰玉へるなれば皇孫命は御自らの其高御座に即坐をいふあり故麻志豆と訓分べし云々○天津璽乃鏡劔　講義云諸本ふ劔鏡とあるゝ上下に誤るものなり考に鏡劔とあるゝ然る善本の有けるなるべし拾遺に天璽鏡劔。神代紀に八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劔三種寶物。古事記に其遠岐斯八尺勾璁鏡及草薙劔とあり云々○今按に此詞に鏡劔のミを擧て玉の事無きにつけて世ふ種々の

說あり講義にも論ありて大凡然ることゝ聞えたれど其大畧鏡劍は神璽にて玉は傳統の御璽也とす所狹ければ省けり此事の予か考は別にありて既く神教叢語に其大畧を錄出せり猶委しき事ハ暇ある日を待つになむ○言壽　講義云紀に天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊祝曰吾兒視此寶鏡當猶見吾云々とある此を云なを云々本註に如今壽觴之詞とあるは酒宴に壽するゞ如しと云なりそハ神功皇后紀十三年云々皇大后宴太子於大殿皇大后擧觴以壽子太子因以歌曰云々とあるを記にもありて其歌の終に此者酒樂之歌也と見えたるが其歌の中に神保岐ほぎ狂ほし豐保岐ほぎ廻ほゝとあるとも て久代の壽觴には善言美詞を盡し極めて云ことなれば天神の此言壽ハ今世にさる事のある

如くなりと注せるなり○宣志久　今按ヨノリタマヒシクは宣給也シクハスと約るとゝ常あり○皇我宇豆御子　考云皇我ハ皇祖神乃御自ト詔たまふ也後の宣命万葉にも天皇の御自如此詔ひしまとあり○講義云宇都御子は紀記共に伊邪那岐命の大御神須佐之男命を指て然宣へるゝ貴子珍子の字を書れたるも此と同じ心ばへの稱ゝ記傳に右の神代紀の訓註に珍此云于圖と見え神武天皇紀に珍彥此云于磐昆古とある宇豆は師說に高く嚴きこと也とあり今の言に人の容貌を宇豆高きと云も能叶へりおほ例は万葉に天皇朕宇頭乃御手以また諸祝詞に宇豆の幣帛なともあを見えたり○皇御孫之命　考云神代紀一書ゝ勅皇孫日葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫

就而治焉行矣賢祚之隆當レ興二天壤一無窮上者矣とゝれ文をへて右と同じ字都より命まして引續けて心得へし○此乃天津高御座爾坐豆　後釋云此祭は大殿の祭ある故に殊ゝかく高御座の事の詔命あるゝ宜なる事也かくて此乃とは即ち上に高御座爾坐豆とある御座を指て詔ふ也そは上文を味ふに其高御座を高天原より降して此御國ゝて も即その天より持降れる高御座と用む玉ふ由ありかの天之石位雖とあるとゝ事の趣異にして是ゝ持て降り玉ふへき御料に設られたる御座と聞えたり故此の高御座爾坐ゝとは詔へるなり○天津日嗣　考云日嗣は日神の御末を嗣玉ふを云りゝゝ後ともて此ことを用るゝもれなり○記傳云こは天照大御神の大御任を受傳へ坐て其大御業と嗣々ゝ知食す由の御稱なり天武天皇紀に皇祖等之騰極とある處に古云日嗣也と註せられたり○万千秋乃長秋爾　考云安國と云々へ續く文なり○講義云瑞穗ゝ係けて宣ゝせたる壽詞なり中臣壽詞に天都御膳乎長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋爾瑞穗乎平久安久云々皇神等毋千秋五百秋乃相嘗爾相宇豆乃比奉利云々とあるを合せて知るべしされは古事記ゝ豐葦原之千秋長五百秋之水穗國神代紀に葦原千五百秋之瑞穗國などある國名ハ此御言壽に依て天神の号させ玉ふ所あるものなり記傳十三に云れある如く神代の年數に抗ては万千秋なとは何程の事にも非るを壽詞と爲さまへる意ハ然にあらす万千秋の長秋に回々重ね行く事に宜るにて意

ハ天地と共に窮り無きをいふなり○大八洲　國号考云大八洲は外國に對ハむ獨立て天下を總云ふ名なり八千矛神ハ御歌に八島國妻まぎかねて云々とよゝ玉ひ倭建命の御言に吾者坐經向之日代宮所知大八島大帶日子男斯呂和氣天皇之御子と詔む孝德天皇の詔にも現爲明神御大八島天皇と宣へり公式令の詔書式にも朝廷の大事に用ゐらるゝ詔にハ明神御大八洲天皇詔旨とあり○豐葦原　國号考云豐は美稱ゝて葦原とはいと〳〵上代に

ハ四方の海べたは悉く葦原にて其中は國處は在て上方より見下せは葦原の廻れる中に見えける故に高天原よりかくハ名つけたる也○瑞穗國　考云ゝづほハゝづゝつしき穗をいふ○記傳云美豆ハ物の美しをほむる言

ゝて是ハ穗をほめたるなり穗は稻穗を云り葦のゝはあトゝ○今按ゝ此は彼千秋五百秋聞食す齋庭の種に付て稱へたる号なり○所知食　考云訓註は本書をもるとと古書皆同じ然れハ注にハ女須とあれど文をハめぜとよむべき理なり云々○以天津御量　講義云大祓詞に八百万神等乎神集々給比神議々給比とある此を謂ふなり天津御量とハ天神の御議ゝて其議は古語拾遺に令手置帆負命彦狹知命作天御量とある天御量ハ本注に大小斤雜器之名也とある如く度量を計る器と波加里といふ其と同言にて議とは相共に其是をいひ聚めて此を其物と其事とに計り合せ其理ハ長たる方に因准ふの言也○事問之　考云物いふことを古はことのふと云り万葉ハ歌

に多くある言也○磐根木根乃立　考云新選子鏡に杠を支利久比と訓○木の杠の事なり木立とは全木はもとよりまて材杭乃〻立てあるすら物言ふと云なり卿の片葉に向へしまても知るへし○後釋云岩根はたゝ岩にて根ゝ添て云ふ言也屋をやね羽をはね杵を杵根矛を矛根島を島根といふ類也木根乃立とある乃字は決めて衍なるへし乃といふ詞ありてゝ調もいとわしきか上ま乃と云へき詞にあらす木根たち也偖他の祝詞には皆木立とあれともこたちと訓てゝ叶はす是は常いふ木立の事に非も考の説に如く杠なれゝ根字あるによりて訓すへきなり○草乃垣葉爾毛言止豆　後釋云凡て草は大かた三葉五葉つゝなと並ひて生る物なるにそれを闕取てたゞ一葉

など殘をてあるさまと以いふ詞にて意は唯いさゝかの草の一葉までといふなるへし云々止豆といへるは云々令止の約りたるなれゝ他とーて止ーむる意なり云々○天降利賜比志云々　講義云かの邇々藝命の高千穗宮の御事より始めて歷世の天皇等の御事ま申せるか直まそれより奥山乃云々といふに續る時は當代の天皇の御上とは成さるを中間ま今字を差狹〻て當今の御事となる文法實に奇ーとも妙なりとも決めて神ならぬ人に企及ふへに處にあトす云々此は皇御孫命の御自ら食國天下を所知す爲ま天降賜ふ由に云て其言を下へ連る故に天降利とは云りらくて次なる詞と反復して食國天下登天津日嗣所知食云々止天降利賜比志と錯綜て見れゝ事義

明なるものそ○食國天下　考云古事記に食國訓レ食云々袁須とといひて總て身にしたがへめす事を袁須と云り○記傳云食國とは皇御孫命乃知し食す此天下を總言ふ稱にして食ハもと物を食ふことも也偖物を見るも聞くも知るも食ふも皆他物を身に受入るゝ意同しき故ゝ見とも聞とも知とも食とも相通はして云こと多くして君の御國を治め有ち坐とも知とも食とも聞看とも申すなり云々○講義云食國天下とハ天降來坐て初國知看しゝ御事を云なり然れハ今代の天皇ならす遐々藝命に係れりさて此食國即天下天下即食國なれは重復れるか如くなれとも然らす天下は其体を云ひ食國ハ其用にて上なる大八島豐葦原水穂國云々より受たる也（續紀宣命にも食國天下と多く見えたり）

○天津日嗣所知食須　講義云今上乃御事を指奉るなり次なる今字と此頭に回らして心得べし○今　講義云今は毎年に大殿祭供奉の時乃今にて其御代を指ていふ此言をもて天孫降臨れ古を別てるなり○奥山乃大峡云々　考云峡は山と山の間なり云々良材は嶺なとゝハあらで山のたわゝに多き物なれハ然いふなり○講義云木を採る深山を云なり祈年山口祭詞には遠山近山爾生立と ありろは山を司り坐す神に申す詞なるか故ゝ汎く然云るか此は唯に宮材の用に付ていふ故に奥山とは云るなり（そは今いふ迄も無く良材の故ろ出る事は專ら深山ある故）山峡は木の生立よろしく又扶梳する所なるをもて也○齋斧　講義云齋ハ齋慎て淨らぬことを避るなり古書中に齊場齋舘齋殿齋殿な

といふより始めて雜具に至る迄も齋斧齋鉏齋鎌など其具の上に冠いふ事常也云々和名抄工匠具部に斧和名乎能一云與伎○伐採　考云貞觀儀式の大嘗宮條に稻實卜部率造酒童女同郡司各一人物部男九人子等五人工十人夫等爲採内院料材向卜食山即祭山神其料云々祭畢造酒童女先執齋斧伐樹工匠次之役夫次之訖歸來この類は常の宮造乃材をは忌部そ乃山に向ひて祭して伐始むること此文にて知べし紀にも後の物にも宮杙を採は山神木靈を祭ること見えたり○本末乎波云々　考云万葉は手むけは祭字を用う○中間乎持出來　考云この中間を用るはもとよりの事なり本末を神は祭るハ今も遠江國人大木を伐てハ其梢を折て切さる本株を中らにさし立侍りぬ古へも然すると本末と山神に奉るとは云ならむ他國にても然をるか問べし○講義云遠江に限らず諸國にてもする事也○齋鉏乎以　考云貞觀儀式大嘗宮の柱立る前に大祓有て始作内院雜殿造酒童女執齋鉏堀稻實殿四角柱穴物部次之役夫次之と見ゆ云々○齋柱　講義云倭姫命世記に齋鋤乎以天齋柱立一名天御柱一名忌御柱また大神宮儀式帳に正殿心柱造奉とある本注に其柱名号稱忌柱と見え云々齋柱と云ハ齋斧齋鉏などの如く齋清まハり仕奉るをもていひ天御柱とは伊裝諾伊裝冉二神乃化堅ゑまひし天之御柱にて記傳に說れたる如く身屋の中央の柱にて所謂心御柱也云々○天之御翳日之御翳　講義云これ迄ハ舍を建ることといひ此には草もて屋と覆

ふ事を云なり○瑞之御殿　考云あらかは在所なり所を
かとも云り○講義云古語拾遺石窟段に手置帆負命彦狹知
命以天御量伐大峽小峽之材而造瑞殿古語云美豆能美阿良可と云々又
神武天皇段建都橿原經營帝宅仍令天富命太玉命孫率手置帆負彦
狹知二神之孫以齋斧齋鉏始伐採山材搆立正殿云々故其
裔在紀伊國名草郡御木麁香二郷古語拾遺之鹿香採木齋部所居
謂之御木造殿齋部所居謂之麁香と見えある是也云々こ
を瑞之御殿汝と引續けたる意に訓へも考ふ乎の字を加へられさるは中々
なる情なり進○汝屋船命　考云汝は常はいましと云ひ崇ゝて
はゝましと云ふ事續日本紀の宣命にて知らる○講義云
汝は御殿を屋船命と崇めてそと汝と指せる也屋船命は
下に屋船久々遲命屋船豐宇氣毘賣命と稱へ別たれと本

一神なりそは屋船命と申す時ゝ木を山に伐り草を野に
苅て造成したる全体の御殿の御靈と坐す神乃謂なるが
ろを辭分ていふ時は木神草神に坐り是故ゝ久々遲命豐
宇氣毘賣命と申せるを屋船と上に冠て申すは其木草を
もて作れる御殿にて稱申すが故にて受張たる御名に非
ず屋は舍宅なり宮といふも御屋なり云々船は舍宅に拘
らぬ神號にて布禰は大根と申す稱名ゝて云々布と保と
通ふ例ゝ天穗日命を出雲風土記に天乃夫比命と書し古
語拾遺に御祈玉古語美保伎玉とあるを此詞ゝは御吹支
乃五百箇御統の玉とあるなどいと多かり保の大なる由
は記傳に御大之御前乃例を引て記ゝ穴大部天武天皇紀
に迹大川万葉十三ゝ爾太遙十九に爾太嬰などありと云

れたるが如き根は主といふ言也云々○今按ずるに屋舟の解諸説穩ならぬ講義に云へる言ども〻信ひがたしこゝに或人云ふく舟は字の義にあらぬ酒槽馬槽などいふ類と同じく物を容る〻器を云なるへし屋は人乃入りてあるものなれは屋舟といふなりむと云ぬ此説や可かるへき

○天津奇護言　講義云こは下に此乃敷坐云々とあると指て云なり上に天神の言壽宣志久とあるい天上にての護言なるか其に因准て宮柱太敷立て屋舟神を鎭祭り其祝事をものする事なるか故に天津奇護言と云なり護言い言壽也然れとも言壽い其對ふ所の神に在れ人に在れ其德とかゝへべき所の美と列ね善と擧て稱へいふ事なるか伊波比許登は其幣物と奠りて齋ひ崇つくを本として即その事の上に於て如此とそ有まほしけれ然あそ願はしけれと希求る條理と告る由也然れは神を社に祠くと伊波布と云も此由なるが其をゝ保具とい云ぞるをもて此差別と定むべしかゝれい奇護言とい天津宮にて事初め給へる奇異なる護言といふ義にて幣物乃御祈玉及び明和幣曜和幣を献て屋船命を鎭奉り給ふを云が久須志と冠らせたるを以この祭の世に妙なる功驗ある事と聞くべきものあり○言壽鎭白久　考云即ち其奇護言を種々と云ひ榮すと云次々にある事皆是也○講義云下に柱桁梁戸闕の錯動鳴事無久とあるに照應ていひ且は顯宗天皇紀室壽乃御祠に築立稚室葛根築立柱者此家長之御心之鎭也と見え万葉集歌に眞木柱太心者有之香杼此吾心

鎮目金津毛とある如く家にはまづ柱をいひ柱には鎮る由をいふ常例と聞えぬれはなるか此詞あるもの如くある上に凡て凡て御殿の全体を以て屋船命の神体となし其御靈を天津奇護言以て齋ひ鎮め奉りの屋船命の平けく安けく鎮坐む事を言壽白す由にて其裡には其御殿の内に坐て天下所知食む皇御孫命を動なく鎮りまさしめ玉へと乞祈む由なるが故に次に此敷坐大宮地云々の事を言竟して其終に平久安久奉護留神御名乎申久屋船久々運命屋船豐宇氣姫命止御命乎波稱奉利互と申す一神の功用の木と草とを集て大成ることを委曲に徴したる文なるものなり○此乃敷坐大宮地　講義云當今の大宮地と云を譬へば邇々藝命は高千穗神倭天皇は橿原などの類なるをいふ也敷坐の事は上に已に注せり○底津磐根乃極美　考云地の底の極りまでと云なり○講義云下に堀堅めたるに照應る詞也こゝ大地の根底までも太宮柱太しく立る際限を云なり高天原に對へるとも知るへし云々○下津綱根　考云下津とは唯殿の下の地にて上の底にはあとなり綱根は顯宗天皇紀室賀の御詞神代紀の大名貴命の宮の事出雲風土記の楯縫郡の詞を合せ見るに上つ代の殿造りは上下縱横に千尋の綱もて結固めし也あゝは其柱根を結し綱によりて下つ綱根といふのゝろ綱も後世の如くはあらす葛もてせし故に顯宗紀に葛根と書たり其外繩根など書しは古に叶はす○神代紀に一書云汝應住日隅宮者今當供造即以千尋栲繩結

百八十紐。顯宗紀室壽に築立稚室葛根築立柱云々。風土記に五十足天日栖宮之縱横御量千尋栲繩持而百八十結々下而此天御量持而所レ造ニ天下一大神之宮造奉ト請而云々○古語云番繩之類云々　講義云荷田在滿曰番繩は昔ハ宮室と作るゑ材と材とを繩にて結ひ着て作れるゑるへしその繩の床下にあれハ下津綱根とはいふが即ち下に葛目乃緩比とあり然れハ此處ハ葛を以諸の柱を互に繋ぎ合すと見えたり○波府蟲　考云波府蟲ハ地にハふ蛇虹の類ゑり上代ゑ國荒く家の構疎に人も平土に臥一時ハこの昆蟲の害ありけむ云々○後釋云蟲ハ地に這ふ物なる故に都て蟲を然云なゑ鳥を飛ぶ鳥と云に同し猶又花をさく花雨をふる雨と云も同事ゑり○高天原　講義云地外を圍繞れる氣中と稱ふ号にて高天原爾神留坐また高天原爾事始天ゑといふ例とハ異なりそハ青雲ぢ靄極と續けるを以知るべぢものなり○今按に天また高天原の事ハ古人も說あり予も少か說あれど別に云へし青雲云々は祈年祭に出たり○天乃血垂　後釋云應神天皇の御歌に毛々和陀流家庭毋見由とよませ玉へる和陀流と一にて古事記上卷には登陀流とありそは上代人家の屋根ぢ寵處の上の煙を出す所乃名なりされは其上を飛渡る諸鳥の毒ゑどある糞またさらても毒物なと咋來て篩乃上へ落す事なとありて其毒にあたる類これ高津鳥の災なり云々○今按ゑ血垂を考には文字の如く解れ平田翁も是ゑ從はれたれと此文上と下とと對へ云るゑて必

す後釋の説の如くなゝでハ叶ひ難し又講義に血は道の義垂は所謂天の八衢とも云ごとく幾條も多き氣脈と云るゝ神ハ更にも云はれ大虚と往來ふ鳥も各其道路ありて通ふ事と見えたりとて下件の説には從はされど予ハ猶さもれはえねハ取らぜ○掘堅多留柱　考云柱根に石と居るハ後あり大嘗宮ハ後世も堀て柱を立今田舍の賤しき厦ハ皆然り○講義云柱ハ和名抄に居宅具柱波之良と あり間在也○今按に名義ハいかゝあらむ信ひ難し桁梁なども皆之に准ふべし○桁梁　講義云和名抄ヨ桁屋桁也計太掛板と云なるへゝ梁棟梁也宇都波利全張なるへゝ○戸闢　講義云戸野王案在城廓曰間在屋室曰戸外ヨリて室中に界闢ふ虚を以いへり説文云在屋曰窓在墻曰闢和名末止とあれど屋あるをも

墻なるをも末止と云なり○錯　講義云木交にて柱桁梁戸闢れ行合ふ所を云なり○今按に加比は合と同し神遺方ヨ水と火氣を加波世とあるなども合せの義なり○葛目乃綴比　考云上ヨ云る綱根も同しくて是は小物の固のゝ古は葛綱を通はして云ひつ○講義云句を隔て下に無久とあり其心也云々上ヨ下津綱根とある下ヨ注る如く上代の家造は何所も何所も繩葛を以結固めし物なるか故に其結目乃綴ふこと無くとは云なり室壽詞に稚室葛根云々を此に對へて思ふへし也○取瞢計留草　記傳云加夜は記に以鵜羽爲瞢草とありて訓茸草云加夜と注せるか本義にて何にまれ屋茸む料の草を云なり云々茅と云ふ一種あるも屋茸くに主と用る故乃名也○噪岐

考云今も亂れそゝけと云り○講義云源氏野分ゟ曾々計たる栞などある此は鳥などの啄〻散すを云なるべし凡ては屋上に取葺く所の草の亂レ無くとの義なることも云も更なり○御床都比　講義云此對に夜女能云々とあるは夜御殿の事を云ことと聲ければ此御床は諦〻く畫御座を云なり都は例の之に通ふ都。比は邊にて御床の邊といふ義也海邊濱邊など多くある語ふり○佐夜岐　考云この所に事無と云べきを下にいふ故に略けり云々神武紀に聞喧擾之響此云左梛覽利奈離いふり如くちやめゆ鳴を何物にも云へり○今按に記傳に物の音の喧しく騷がしき事也とて委しく說あれと長けれは引出す○夜女　後釋云夜女は夜目にて夜眠れるほとを云ふ朝に目覺さるを朝目と云に對へさる

言なり○伊須々岐　考云伊は發語の〻古事記に神武天皇の后の御母陰を神の矢に突れて立走伊須々伎々といひ又火遠理命へゝの鉤を咀て返し給ゟ須々鉤とのたまふことを紀に跟蹤鉤と書たるをもむかへ万葉ゟ二人の男乃一人の女を爭ふを須々志競と云るも皆後世すゞろと云ゟ同しくて心も心ならぬすゞろく事あり○後釋云こは夜ふふれる程ものにはれそはれなどして驚く類をいふなり○伊豆都志伎　考云万葉に旅路などに都々美なく在と云はあやまち滯なかれといふ意なれゞ右の伊須々支に續け云ふべき言也○後釋云こゝハ上の御床つひのさやぎと夜女のいすゞきと二ッを受てさる類の伊豆都ーに事無くといふなり○屋船久々遲命　記傳云久々は

莖なり和名抄に莖和名久木とありうを久々と云るは万葉十四に久君美良（莖詣おり）また九久多知（和名抄ふ並久々多知蔓菁苗也）なと云へり智は男を尊む稱也○史徴云古事記に伊邪那岐命伊邪那美命云々次生二木神名久々能智神一次生二山神名大山津見神一次生二野神鹿屋野比賣神一亦名野椎神神代紀に生二木祖句々廼馳一次生二草祖草野姫亦名野槌一書ふ生二木神等一号句々廼馳なと見えたれとも悉く誤れる傳にて實は木神草神ともよ豐受姫命の幸御魂ふ坐すなり○屋船豐宇氣姫命　史徴云引結帯（魯）葛目乃緩比取葺（計魯）草乃噪無久と云るは野神草野姫神の幸ひたまふ功德に係れり然るを草野姫といへをて豐宇氣姫命と云るハ如何と云に此神實は稻穀を生玉へる神ふ坐すを餘草をも生し玉へるは其幸御魂の御業なる故に此は本御靈の名もて云るなり又稻も莖も共ふ草なれは取總ても云つへ殿造には草は木に次てやむとなき物ゆゑに如此委曲ふ言壽奉ることなるに草野姫神を擧さまはぬ事のあらめや云々○講義云屋根に曹く所の草の神也然らハ草野姫とか野槌とか申をべきを如此なるは辟木束稻の事をも兼たるが爲に其本ハ御靈の名を表章せるなる云々且は上ふ天津日嗣所知食云々とありて下にその結びありて皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉と見えさる其事を兼されば屋舟草野姫とハ云ましくその本もて屋舟豐宇氣姫命とは申すべきことなり○是稻靈也俗謂宇賀能美多麻　講義云是稻靈也はその豐宇氣姫命の本分の御德を注せる也○今按に紀に伊弉諾尊

の飢時生神曰倉稲魂命とあるは正しく紀に生大宜都比賣神とあるにあさり此大宜都比賣やかて保食神にて豐宇氣神も同神にますことと古史徴の説動くまじく所思れべ宇賀御魂神即豐受姫神也さて宇氣を食の義にてうの宇を省きて氣といひ又宇加とも活用す由なとい記傳に説れたるを見るへし又按に俗謂云々とい稲の靈をこの詞記せる頃の俗より專ら宇加能御魂と云ひしよりて其は即ち豐受姫神の御事也と注へるなるへし講義に此れ注を非として豐受姫と宇加乃御玉とは別也としたれと予は信ひ難けれは其説を出さす○辟木　講義云木を辟て其中に木葉を刺し葛もて結へり吾淡路の方言にサイ木と云て年始に門外宅内に立る物なりサイ木はサチ木の音便なるべし又正月に山神を祭るにも立る事也云々正月門松注連飾等の事と見えたり云々○束稲　講義云束稲は稲を束ねて外邊に掛置て妖氣を避るなるべし云々○以米散屋中　講義云神事に物にる散米にて此は殊に妖氣を拂ひ不淨を清々しくする事なる故に諸神事に遺り傳はれるものとおぼえたり云々今も淡路國などには打蒔とて産屋に搗精げたる米を置くい古の遺れるなり○今按に平田翁乃玉襷ふ今昔物語の兒の枕えに在りし米を投て妖物を逐ひし事又物語書などに打まきの事を云るなどを引て山人に伴れたる寅吉が話とも擧げて妖物の精米を畏るゝ由を云いれたり其事いと長けれは引出す彼書を披見るへし○齋玉作等我　後釋云齋て

玉を作る人なを齋は作る人に係れる稱也○議義云姓氏錄に齋玉作高御魂命孫天明玉命之後也云々とある是なり古語拾遺に太玉命所率神云々櫛明玉命出雲國玉作祖也また櫛明玉命作八坂瓊五百箇御統玉と見えまた神武天皇段よ櫛明玉命之孫造御祈玉（古語美保伎玉言祈玉也）其齋在出雲國毎年與調物貢進其玉と見え臨時祭式にも凡出雲國所進御富岐玉六十連（三時大殿祭料三十六連臨時二十四連）毎年十月以前令意宇郡神戸玉作氏造備差使進上とある是にて云々齋を加へて云るは太玉命以來其齋の率る所の齋部なればなり

○瑞八尺瓊云々　考云八尺瓊は長き緒に五百と多くの玉を貫たるをほめいふ也その八は彌（ヤヤ）にて云々尺は漢字を借しの〻云々（八尺を八坂とも書ーよ依て玉北出ー地名ぞと云はいふに足らず）御統は御は眞にて美（ミヤ）る言にまるハ數の玉を緒に貫てとがゑくゝりよせあるを云ふ云々御吹は右よ富岐と書しよて（今云）こは臨時祭式に御富岐玉とあるを云はれーー也吹は借字かるを知べし此祭を大殿ほがゐと云てほがひはほぎを延たる言又上よ言壽鎭ともいひ下の神賀にも玉もて壽（ヤヤ）申せり然れはかゝる祭ふ奉る故に御壽の玉とは云なり云々○講義云御吹伎ハ御祈（ヤヤ）也古語拾遺に御祈玉古語美保伎玉言祈禱也云々○記傳云美須麻流は神代紀に御統此云美須麻屢とあり纂疏に以絲貫穿總括之也とある意にて須夫流と語通へり志婆流志麻流なとも本同言の轉れるへーー云々○明和解　考云氏は多倍の約にて爾岐多倍とも爾伎氏ともいふのゝ明曜は其色をいふ事上よ出爾伎いよく調ひあへる事を万の物に云りと

こゝ布のよきを云○記傳云幣字と書くゝ神に奉る方ゝ付ての事ゝて此物の本義ゝはあらゝ○齋部宿禰　考云宿禰と書ゝ借字にて少兄と云言也ゝは本皇子と大兄と申し臣と少兄と云るもて臣の一のかはゝと成ありそれ奈延の約禰なれゝ須久禰といふ且兄はえともぜとも云て人を崇むる言也さてかばねはあがまへ名ちふ事にて總へてのゝらばゝ皆其氏にゝけて崇め玉むで上より賜はせり此事後人多くは惑へり○今按ふ氏姓の事記傳允恭天皇段ゝ詳なる事長けをは引かれ又考に此を崇へ名の義とせゝられたれど信ゝ難しまた齋部氏の事は祈年祭詞の末ゝ見えあり○言壽鎭奉事能云々　講義云上に天津奇護言乎以言壽鎭白久とある結なり云々あらゆる居宅具と並べ擧てそれ〳〵の言壽をなして屋船命の御靈を齋ひ鎭むるか尙遺る所あらむかと其心ゝらひして漏落む事とは云るなり云々さて此文のかく盡したる上ゝも猶漏落む事をは云々とあるすへての事の趣を考へ見よ屋舟命は瑞之御殿ゝ神靈なるか居宅の具と成れる物悉く木なるゝ久々遲命草なるは豐宇氣姫命と二柱神の主領ゝ在す事なるか故に平けく安けく住居する事なり然をは少しき葛目の緩ひ少なる草の噪と云とも此神等の能く守り玉ふと守り玉はさるとゝ間ゝ在る事なれは殊に此大殿祭またゝ庶人の宅神祭はよくせまほしき業なり○神直日命大直日命　考云伊邪那岐命身滌ゝ給ひて先は十禍津日神ゝ生給ふとそれ直ゝ給ふとて次に神直

日大直日二神を生ましきその二神万ッのひか事をも宜し
く直し玉ふ故ゑかくは云り○記傳云直日とは禍を直し
玉ふ御靈の謂也○講義云屋舟神等の御靈と言壽き齋ひ
鎭め奉れるか豈諸種の物ともと悉く擧る事を得むや漏
もし落もしあらむを神直日命大直日命そを知食して諸
の禍災事勿らしめ玉へとなり○聞直見直　講義云聞直
ハ祝詞ゑ係り見直は幣物ゑ係れることゝ云も更なり
詞別白久。大宮賣命登御名乎申事波。皇御孫命乃同殿能裏爾。
塞坐氐。參入罷出人能選比所知志。神等能。伊須呂許比阿禮比
坐乎言直志和志古語云坐氐夜波志皇御孫命朝乃御膳。夕乃御膳供
奉流。比禮懸伴緒。繩懸伴緒乎。手蹟足蹟古語云麻我比不令爲氐親王
諸王諸臣。百官人等乎。已乖乖不令在。邪意穢心無久。宮進米爾進。
宮勤爾勤之米谷過在乎。見直志聞直坐氐。平氐氣安氐氣令仕
奉坐爾依氐。大宮賣命止御名乎稱辭竟奉久登白。

○詞別白久　今按ゑ此大宮女神ゑ白ゑ詞は大殿祭ゑつ
れて其大殿内ゑ坐して御功をす神を祭る事なるか殊更
ゑ其祭禮式をはなさて大殿祭ゑ引續けて此詞を申れ故
ゑらくはあるなるへし下の御門祭も御門は大殿ゑ屬た
る物なれは是亦同時ゑ祭るゑゑ有ける猶次の條をも見
合せへし○大宮賣命　古語拾遺云令大宮賣神侍於御前
是太玉命久志備所生神如今世内侍　○考云古語拾遺ゑ大
首言美詞和君臣間令宴樂悅懌也
宮賣神は天照大御神の御前ゑ侍給ふ神ゑて今の内侍の
君臣の間を和するゝ如しと云るはとゝゑ合へり○今按
ゑ此神の御事古史傳及ひ玉襷等ゑ委しく見えたり○同

殿能理爾云々　講義云殿を意富登能と訓む証は拾遺より大殿祭の大宇を省いて殿祭と作き神代紀に同床同殿とあるを殿河風土記より引る香具山日記よりは同床共大殿とあるを彼此合せて知るへきなり云々○塞坐　講義云物より蓋をして刺塞いたる如く神の御殿内より充塞り在すをいふ○參入罷出人　記傳云參は貴所へ向行をいひ罷ハ貴所より退去を云○講義云此は日々より王臣の朝參する事を云り云々○選比所知志　講義云天皇の大御許より參入罷出る人の品を鑒定たまひ然るましき人の出入を止めさせ玉へとなり○神等能伊須呂許比云々　考云伊須呂許比の伊は發語にて須呂は須々呂の略許比は伎の延言にて須々呂伎也とは右よも云る如く心も心ならすあるとすゝろぐと云より同じくてかの八十禍津日神等のさまといふ也云々かく惡しき方へひきゐる神と和して逐ひ玉ふ女神の功といふ○講義云言直の言ハ事業よりも言語を云なり和は荒るゝ者を和むると剛き者と解くとの二義と存せる言也言直は言語を以其曲るを直す由なるを和しは御業を以その荒びを鎮むる意あり○比禮懸伴緒　考云領巾ハ女の懸るものなり古は總て女乃懸しと紀よも万葉よも見ゆれとこゝハ襷かくる男と對へいへハ大御食に仕る采女を專ら指いなり○記傳云比禮といふ物ハ何にまれ打振る物といふ然れハ魚の鰭も水中を行とて振る物服の領巾も本を振る料なり上代に領巾は必す振るこをいへり○御食より仕奉るに殊に比禮を懸る由は比禮

はもと振て蟲などを攘はむ爲に懸るもれなりしか後遂に禮服となれるなり云々○和名抄に領巾頂上飾也日本紀私記云比禮○伴とは官職にまれ何まれ一部ともなふを云某伴某伴と云是なり登毋賀良なと云も此意又何となく交り親む人を友と云も同意なり緒ハ長の本語まて云々伴緒は其部屬れ長をいふ稱なり○襁懸伴緒　考云御食を造る男たちなり業する人は襁かくる事既に忌部乃幣と頒つ事まと云か如し○後宮職員令に采女六十人延喜采女司式爾采女四十人と見えたり同令內膳司に膳部六十人掌造御食といへり○講義云天武天皇紀に膳夫采女等之手襁肩巾とある采女まは肩巾を當れハ膳夫ハ襁あくる伴緒也○手頸足頸　考云大御膳に仕奉るに手足

れあやまちつまづきあらせぬなり○後釋云手頸ハ御膳物を取はづし過つ如き事なり○講義云万葉二まに黃葉乃散乃まがひにと有は黃葉の散まよふ事まと云るかまがひに亂字はよく當れりゆくりなく過つを云なり○親王諸王諸臣　後釋云ずへて如此さまに列ね擧ることを上代には臣連國造伴造百八十部なと云りき諸王諸臣と連ね云る事は書紀の推古卷に見えたり其頃よりの事なるへし さて天武卷に至りて親王諸王及諸臣とも親王諸王及群卿とも親王諸臣及百寮人とも親王諸臣及百官人等とも見えたり○百官人等　考云官人といふは令にてハ初位以上六位以下官位ある人と云れと是には無位まて總て仕奉る人を云へし○後釋云百官と云ことは何頃より云

そめけむ甚古くして古事記よも見えたをされどとはも
と漢籍に倣へることあるへし○今按に風神祭詞爾百乃
物知人と見えて此は固りの古言と聞ゆれは百官人とい
ふことも有りやしけむ必しも漢に倣へりとのゝ云難
かりぬべくや○已乖々　考云れのゝむれ〳〵は万葉に
もよめり○講義云已か向々に氣隨なるをいふなり○今
按ゝ乖字はソムクと訓はムキと云むは如何なをともれ
ほよそに借て書るなるへし○邪意穢意　今按に邪も穢
も大凡似ゐることなれとそを如此さまに重ね云ひて文
を飾ることと古言に例多かり清支明支誠心あとといふ類な
り○宮進　後釋云百官人の大宮に參入仕奉る事を此神
の勵したまふを云なるべし○講義云進ゝ大宮仕に怠退

こと無きと云なり○宮勤　講義云宮仕に緩〻怠ることと
なきを云○咎過　講義云已乖々乃事は咎あり手躓足躓
れ如きゝ過なり○大宮賣命止　講義云上に擧る如き御
守はしも恐く君臣の間爾係れる國家の大事なるを此神
の大宮の内に塞坐て預り所知食す御靈に依れる故に大
宮賣命と稱へ奉れるなり云々拾遺に大宮賣命云々本注
云々今云上に擧たれる事ーつとあれば唯に君臣の間の事の如くな
れとも此詞に神等の伊須呂許比阿禮比坐を言直し和し
坐とあれば神と君との御中をも和したまふなりけり云
々

○御門祭

○考云四時祭式に四面御門祭十二月準之御川水祭同上　これ

左に右四面、祭御門、巫御川水、祭座摩、巫各行事と見ゆ夏は六月か式に漏たり○講義云四時祭式に云々と見えたるは此御門神は四面、御門に齋く所。座摩神は御川水に在を所也と雖常は神祇官、西院は齋かれ御座て祈年月次新嘗等は其所よして祭らるゝ所なるを六月十二月兩度然るへき日はその守護り坐す四面、御門はつき御川水は付て祭らるゝ其幣物也とを齋部氏の仕奉る御門祭の料あらむと思ふは非すそは祝詞の首は凡祭祀祝詞者御殿御門等祭齋部氏祝詞と見えたるは少しも拘る狀なトぬは別なるか故也思ひ混ふへからを齋部氏の行ふ御門祭へ大殿祭に攝行はるゝ事下に云るか如し○講義云祝詞式に此詞をかく別條に出されたをと雖そ乃式は大殿祭に隷て共に行はるゝことにて眞には其詞別の如くある也そは古語拾遺に殿祭門祭者元太玉命供奉之儀とあるは上に云る如く同書岩戸の條に天照大神を新殿に遷し坐せ奉る下に天兒屋命太玉命以二日御綱今斯利久迴云々米縄一懸其殿一令二大宮賣神侍一於二御前一令二豐岩間戸命櫛岩間戸命二神守二衛殿門一とある時に供奉られし事にて皇孫命乃初國知食し高千穗にて定りつる神事と見えたり但守二衛殿門一とあるは深く心ありて記されたる物にて常に宮門なとゝ云とハ異よて御殿と御門とを守衛玉ふとの事也さるは大宮女神ハ御殿の内なるに御門神のそを守護り坐とするは如何しき狀なれと猶委しく見るに令二大宮賣神侍一於御前とあ

ると大殿祭に詞別とを合考るに大宮賣神は專ら内
其大殿の内に坐て君臣の間の事を守らせ玉ふを御德
とし玉ひ御門神は御門は云も更也御殿にもあれ人の
往來出入ある戸口と守衛あまふ神にませい守衛殿門
とは聞えたる事ありけり云々此詞乃大殿祭に付てろ
れ詞別れ文あるも又謂たる古傳ならずやさるは屋船
命と申すは御殿は更なり御門にも何にも木を以造り
草をもて覆ひて屋根とする所は悉くこの神の恩賴に
依る所なるか其内に在る所れ物事い大宮女神此を防
護り其戸外に在る物事は御門神此を守衛給ふ故に
彼此相分るが如くあれども共に屋内にして在る事な
れば眞に屋船神爾屬けてそ祭らるへれ事なをける拾

遺神武天皇段に天富命云々殿祭云々次祭宮門（今云上に出たれば略す）とあるも別々に行はれ一狀あれど能見れば次々
引續けて行いるゝあり云々又殿祭門祭者太玉命供奉
之儀云々中臣忌部候御門云々とあるい殊に亮々なる
者なりさるい殿祭門祭といへれは異ならむ爾い宮内
省奏詞にも件を別けて云いて聞えがたきを將レ供奉御
殿祭而中臣忌部候御門とも云るは御門祭は御殿の
中に在て行はるゝか故也云々貞觀儀式延喜式北山抄
江次第等にも其儀式を別に載られざるは大殿祭の中
に在るを以てなり祝詞式の首に御殿御門等祭者忌部
祝詞とあれは其頃著明き祭祀なるを何れと見ても幣
物い更也其式をたに記されさるに疑をつけて考ふへ

き事ならずや然るを賀茂翁の考に四時祭式ゟ云々今云上ゟ出せれは是は巫を神主とし忌部は祝詞を讀む奉爰には署す幣は本ゟ也と云れつれとも委しからずそは四面御門祭は其巫あをて常に仕奉るそを以祭らしめ玉ふあれハ忌部のもとより預る所ならず且御川水祭と並へ行はるゝも大殿祭とハ別なるか故なり云々四時祭式大殿祭乃條に云々そ乃祝詞は忌部向レ巽微聲申祝詞と ある其中ゟあるべしそは此御門神も大宮女命と共に鎮坐す所神祇官西院なれハ其方を指して巽にハ向へるなり且御門神には玉の用なれか故に祝詞には記さす散米酒のゝなり幣物を進ること無し云々櫛岩牖豐岩牖と申す事はと有て上に大宮女命止御名乎白事波とあると同じくして考に此上に今少し言の有らぬは無ゟ是のゝかゝるハ若落たるかと云れたる如くなるはいひしらぬ味にて大殿祭の詞別と相並るが故なり

櫛磐牖豐磐牖命登御名乎申事波。四方内外御門爾。如湯津磐村久塞坐氐。四方四角與疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾古語云麻相麻自許利相口會賜事無久自上往波上護利自下往波下護利待防掃却言排坐氐朝波開門夕波閉門氐參入罷出人名乎問所知志咎過在乎波神直備大直備爾。見直聞直坐氐平久安良氣令奉仕賜故爾豐磐牖命櫛磐牖命登御名乎稱辭竟奉久白。

○櫛磐牖豐磐牖命止今按に古事記に天之石門別神亦名謂櫛磐窓神亦名謂豐磐窓神此神者御門之神也古語拾

遣に令豐磐間戸命櫛磐間戸命二神守衛殿門（並是太玉命之子也）と見えたり猶祈年祭御門巫祭神の下に云へり○講義云ふは大殿祭の詞別に大宮賣命止御名乎申事波皇孫命乃同殿能内爾鎮坐とあるに對せる文なり云々御名乎申事波と云るはもとよりの御名にあらぜ其守衛たまふ事に就て稱たる所なるが故に上句は上より云々神を云々と御名を申す事はとある意也そは櫛岩窓豐岩窓神は本名天石戸別神なると御門を守り給ふ由を以て然稱へたる事の本を表す故に如此へ云るなを○四方内外御門　後釋云内重中重外重を兼て云なり考に内は中重の諸門と云れたるへいらゞ○如湯津磐村久　考云多くの群磐ちふ事也村へ群の意○疎御荒御來武　考云神皇祖の御言向に從はせして御孫命を疎む也云々○天能麻我都比登云神　考云古事記に初於中瀬隨迦豆伎而滌時所成坐神名八十禍津日神（訓禍云麻賀下倣之）次大禍津日神此二神者所到其穢繁國之時因汚垢而所成神也云々とへに此神といふ○今按に天能は天上之の義にて天上に坐す禍津日神といふなり常に天之某神と申は天のとへ聊か異なるへし御門祭の元へ上に記せる如く天照大御神乃天岩窟より出まして新殿に遷坐しへ時に御門神に殿門を守らしめたりとあるに起れると此岩窟隱の惡事へも禍津日神の御荒より事起りけるなれは即ち其天上なる禍津日神の禍言の再ひ起らさトむ爲ふ如此云むて御門神に祈白せる遠つ神代の語の傳へり來しものありけり此を思ふにも此

詞ともの最古く貴ル由と辨ふべし○言武惡事　講義云爲武と云へきに似たりと雖行は事にて事に用は言なれは必すりく云へし○後釋云麻賀とは諸乃凶事惡事をいへは惡事と書る當れり考ヨ惡事と書るは却て遠し枉事と書て直ならぬ事也と云れたるは中々ヨ狹ス○相麻自許利　考云この麻自は蟲物厭なとのましの類なから爰ヨ云は今人ル目ましくり口まーくりとゝふ是也次の道饗祭ヨ根國底國與利麁備跡備來物爾相率相口會事無久と有もまーくりて率る意もて率とは書しもの故ヨ彼ともこゝをもて相ましとりと訓へし○後釋云神代紀ヨ當遭害とありましなはるゝなり○今按ヨ交雜などの類も其本は同言なるへし○相口會事無久　後釋云相口會はか

の惡言を諾なふをいふさてその惡言を諾なふすなはち交とるなれハ交りてと云意ヨ見るべし麻自許利と口會と二ツヨはあらも偖そは百官人等の事なるを此は其神の守り坐て然ることと勿ふしめ給ふ故ヨ賜事無久と云るふり賜は此神ヨ係れる言なり然れば會は阿閉と訓べし阿閉は考ヨ云れたる如く阿波世の約りあるヨて合レ會の意なれは也○講義云麻自許利は惡行ヨ黨るゝを云ひ相口會は惡意ヨ與するをいふなり○自上往波云々　講義云正しきも邪れるも神は甚奇く靈ーきものヨて虛空は更なり地下と雖潛り通りて達る者なりければ如此の御衛護あることなり○待防掃却　考云万葉に不奉仕國乎佛部等とあり同事を卷二十ヨ麻都呂倍奴比等乎毋夜波

之波吉伎欲米ともよめり却は退逐なり○今按ゝ掃を考ゝハ。ギとよみ後釋ゝハヲ。ヒと訓り考說の如く同事なるは何ゝよてもあるべき中に爰は猶ハヲ。ヒといふ方まされり○後釋云掃却は禍津日神の來るを拂ひ遣るなり○言排坐豆　後釋云言排は其惡言を云て人を交らむとをるを此御門神の言退て交とらしめざるなり排字は如何ゝよむべきゝか慥ゝ思ひ得ぬど字書ゝ推也とも斥也とも注したれは曾氣と訓都考ゝよ。とひ。ら。ゑと訓れたれどいかが○講義云記傳ゝ万葉ゝ山の衣寸野之衣寸云々曾伎は曾久を体言ゝ云るゝて曾久とは離放る意なりと云れたる其義ゝて此の排もその惡言を遠く遁放て相口會ーめたまはさる也○參入罷出云々　講義云上の詞別ゝは選

所知志とありて彼は宮仕の人ゝ善惡邪正を選ひ然るべかゝぬ人を大殿内ゝ令侍たまはざるを云と同じく此も然にて御門内ゝ入るゝ惡人と選て入しめ玉ハざる事を云なり○神直備大直備爾云々　今按ゝ此は大殿祭に神直日命大直日命とあるとは異にて神乃御名にあらを直に御門神の直毘を申せり○平食氣久云々稱辭竟奉久止白　講義云二神の名の櫛と豐とを此にては反して稱ゐりさて此ハ上の詞別の結文に少も違ふ所あゝ此文乃然對へるを以ても大殿祭詞は本文にて上の大宮女命と此詞の。二ッは共に屬たる詞分なること愈書きもありかし

明治十六年九月廿七日出版版權願
同　年十二月十八日版權免許

定價六十錢

著述人　東京府士族　久保季茲
四谷區四谷須賀町
三十二番地住

出版人　同　平田胤雄
本所區柳島横川町
十壹番地住